

連載 企業および社会における情報システムの意味を考える

第18回 新情報システム学序説の発刊に寄せて その1

大島 正善 (MBC:Method Based Consulting)

1. はじめに

この2月28日に、情報システム学会では、「新情報システム学序説」を発行した。すでにご存じの方が多いと思うが、情報とは何か、情報システムとは何か、という哲学的テーマから始まって、人間中心の情報システムという、コンピュータ・システムではない情報システムというコンセプトに基づいた新しい情報システム学の確立を祈願して20名以上の関係者が執筆したものである。

この本には、「人間中心の情報システムを目指して！」という副題がついている。この副題は、学会設立時からの理念であり標語となっているので、読者の皆様はよくご存知であろう。

私も長年情報システムの構築に関わり、しかも、大規模な失敗プロジェクトの立て直しにもいくつか関係した者として、その理念はよく理解できる。情報システムの構築には理屈や理論が確立されているわけではなく、「こうやればできる」というハウツーだけが先行して宣伝されるものの、「なぜ、そうやればできるのか？」という疑問に答えることができないというのが、大きな問題だと長年考えていたからである。

序説の最初に、鉄がどのような化学反応でできるのかという化学式が提示されているが、製鉄の世界とは異なり、情報システム（ここではソフトウェアととらえてもよい）がどういう理屈の上に存在するのかということは、いまだ確立された学問体系があるわけではないという問題意識が、長年学会関係者に存在していたという話を私は数年前に知った。

この序説では、6章から8章を主担当で執筆したこともあり、どのような意図をもって執筆したのかを数回に分けて書いてみたいと思う。

2. 人間中心の情報システム学における開発ライフサイクルと開発方法論の骨子

“人間中心の情報システム”という意味は第一部に書かれているので、ここでは解説しないが、第二部のエンジニアリング全体を通して、組織が存在し、そこに何らかの活動があるとなれば、その活動の中に、情報を扱う仕組み（それを情報システムと考える）が存在するというのが、最初的前提として考えていることである。

組織の活動にはPDCAがあり、モノ、情報、お金の流れが存在するということは、もはや常識であるが、今の時代に組織活動の中で重要となっているのが情報流であるということも、もう一つ的前提として考えている。

企業などの組織が、競争優位に立とうとするのであれば、情報流のPDCAを効率よく回す

仕組みを情報システムとして確立することが重要であるということである。

そういう前提のもとに開発方法論ということを見ると、従来のシステム開発方法論が想定していない世界があり、そのことについて触れているのが序説における開発ライフサイクルと開発方法論の章（6章）のポイントである。

とはいっても、多くの内容は従来のライフサイクル・モデルと開発方法論の紹介に割かれているのは、序説が、今後大学や高校での「情報学」ともいうべき講座のベースとなる著作物であることが前提となっているからである。ただし、従来（現時点の最新のものも含め）の開発ライフサイクルが対象としているのは、ソフトウェア・ライフサイクル論にせよシステム・ライフサイクル論にせよ、本質はハードウェアや人の活動を含めたとしても、主たるコンサーンは、ソフトウェアというシステムをどう作っていくのか？という観点でしかない。そこには、組織活動の仕組みをどう構築しているのか？という視点は存在しないといってよい。あるいは、情報システムは特定の組織の業務の範囲を超えて、社会システムといった不特定の利用者を対象となる場合、その開発方法論というのは、いまだ確立されてはいない。それは、不特定の利用者の要件をどう收拾しぶんせきしてまとめていくのか？ということに対する回答を従来の開発方法論が提示できていないことから理解できる。そういったことに関しては5章の事例が参考になると思われるが、まだ方法論が確立されているわけではないことは確かである。

組織活動の仕組み作りそのものが情報システム作りだという考え方に変わると、情報システムの開発方法論の対象は、ソフトウェアの開発が中心となるのではなく、ビジネス活動の仕組み作りとその改善活動（それを運用・保守という）であるという位置づけに変わってくる。あるいは、不特定多数の利用者を前提とした社会システムを構築するという観点から開発方法論を考え直す必要がでてくると思われる。また、開発よりも運用・保守に重点が移り、開発（仕組みの確立にすぎない）後の継続的改善という活動が重要であることに気が付くであろう。組織活動における継続的改善という考え方は、「学習する組織を確立する」ことだと言い換えてもよいが、それが、まさしく、組織活動の仕組みの「開発方法論」だといってもよい。

そして、情報システムの開発（組織活動の仕組み作り）において、ビジネスの仕組みがどうあるべきかという検討の重要性が当然ながら明確になってくる。その点は従来から指摘がなされているとはいえ、情報システムをコンピュータ・システムと考えがちな日本人は、その意味をなかなか理解できていないので、間違っただけのシステム開発のやり方をしている例が絶えないのではないのだろうか。人間中心の情報システムという考え方が根付けば、そういった間違いが大幅に減るのではないかと期待している。

以上